



ひとびとの歴史を表現する：首都圏開発と市民活動 の現代史的探究

著者	猪瀬 浩平, 植木 献, 長谷部 美佳, 荻村 哲郎, 可部 州彦
雑誌名	明治学院大学教養教育センター附属研究所年報 : synthesis = The annual report of the MGU Institute for Liberal Arts
巻	2021
ページ	28-28
発行年	2022-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10723/00004335

ひとびとの歴史を表現する： 首都圏開発と市民活動の現代史的探究

プロジェクトメンバー：猪瀬浩平、植木献、長谷部美佳、荻村哲郎、可部州彦

本研究プロジェクトは、戦後の日本において市民活動・運動が如何に展開されてきたのか、首都圏近郊を主たる対象に探求するものである。特に、障害のある人や外国にルーツを持つ人と共に生きることを目指して行われてきた活動に焦点をあて、首都圏の開発との関係に留意しながら、市民活動・運動が如何に実践されてきたのか、言説と日常実践の双方の調査・分析を通じて明らかにすることを目指して研究を行ってきた。

新型コロナウイルスの感染拡大によって、昨年度予定していた調査が予定通り遂行できなかったことにより、本年度まで研究期間を延長した。

本年度は、埼玉県越谷市・春日部市を中心に活動している、障害者運動団体わらじの会について、特に設立当初の資料（テキスト、写真等）のデジタルアーカイブ化を行うとともに、現在の活動記録の作成を行った。

わらじの会は、東武伊勢崎線沿線の人口急増期に生まれた障害者団体であり、都市と農村の文化がまじりあいながら、障害のある人の地域生活運動を育ててきたこと、およびそのことを関係者自身が意識化しながら運動を展開した点に特徴がある¹⁾。現在、本研究プロジェクトも協力する形で、わらじの会を始めとする埼玉の障害者運動が生み出した思想を、水俣病や有機農業運動など戦後の日本の社会運動とも関連づけながら考察するブックレットの編集が進んでおり、2022年に生活書院からの刊行を予定している。

また、新型コロナウイルス感染症の発生状況を注視しながら、首都圏における多文化共生をめぐる活動の記録作成や、資料の収集を進めていく。焦点は神奈川県横浜市と大和市にまたがるいちょう団地を中心にした地域である。特に、いちょう団地は入居開始から今年度が50周年にあたり、その歴史を振り返る中で、外国籍住民の流入を「いちょう団地史」的に振り返ることを通して、郊外集合住宅における「多文化共生」のあり方を考察していく。

以下は、本研究プロジェクトにかかわる昨年度、本年度の研究業績である。

猪瀬浩平2020「『公有地』を耕す」『すまいろん』108：38-41

猪瀬浩平2021「誰もが共に生きる埼玉県を目指して」『人権と生活』52：19-23

文献

1) 猪瀬浩平2019『分解者たち——見沼田んぼのほとりを生きる』生活書院